

# グループホームでの暮らしを築く ～重度知的障害のある人の自立について～

社会福祉法人八千代翼友福祉会  
ケアホームもやい職員研究集団

## はじめに

私たちは「地域での普通の生活」実現をめざしてケアホームを創設してきましたが、この中で重い知的障害のある人たちが、数年をかけて安定した暮らしを築き始めています。

入居された方は、すでに「青年期」を過ぎた方たちが多いため、数十年の「庇護された」環境からの変化は大きな試練であったろうと思われます。

今回、「試練を乗り越える」プロセスの中での気持ちの変化や行動に着目し、そのことの持っている意味（自立的生活への道行き）を考えたいと思います。そしてそのことを通してGHの役割についても確認したいと思います。

## 1. 「ケアホームもやい」の概要

ケアホームもやいは、本人・家族の願い、そして当法人の「地域で・普通の・大人としての・生活を！」という基本理念実現の一つの形として平成22年4月に開設（男性棟・定員4名）しました。

平成23年4月には、ケアホーム第2もやいを開設（男性棟・定員4名）、平成24年4月にケアホームゆいを開設（女性棟・定員5名）し、現在は14名の利用者さんが暮らしています。（年齢構成・障害支援区分は別表1）

入居者は、主に家族の高齢化等の家庭事情により入居希望された方と、本人の「行動障害」により家庭生活が厳しくなった方に大別されます。後者の入居（優先）を、方針として位置づけているのは当法人の特徴の一つでもあります。

基本支援方針として、①利用者が安心してくつろげる場となるよう、一人ひとりの生活ペースを尊重した支援をする。②お互いに尊重しあうこと、支え合う「家族的」絆を創ることを、大切にする支援をする。③「地域の一員として暮らす」ことを具体化できるように支援する。以上3点を掲げています。また、支援における重点目標として、利用者が「家族的」絆を深め、主体的に充実した暮らしが築けるように支援することを掲げています。

利用者さんの暮らしのスタイルは2つあります。一つは、ご家族が健在の場合は、本人、家族の願い、そして、事業所も家族と一緒に過ごす時間は大切だと考えるところから、主な日中活動の場が休日の場合、自宅に帰宅する方がいます。もう一つは、ご家族が、利用者さんの介護が難しくなり、必然的に生活の基盤がグループホームに移行し、365日利用する方がいます。

住居	第1もやい		住居	第2もやい		住居	ゆい	
性別	男性		性別	男性		性別	女性	
定員	5人		定員	4人		定員	5人	
メンバー	障害支援区分	年齢	メンバー	障害支援区分	年齢	メンバー	障害支援区分	年齢
D	6 ※	50	I	6 ※	31	A	4	36
E	5 ※	37	B	6 ※	34	C	6	48
F	6 ※	37	J	4	50	L	4	49
G	6 ※	43	K	6 ※	44	M	5	35
H	4	51				N	6 ※	40
平均	5.4	43.6	平均	5.5	39.8	平均	5	41.6

※は行動援護対象者

## 2. GHに入居してからの利用者の変化と現状

GHに入居してから、利用者にどのような変化があり、それらの変化にはどのような要因があったのかを、「GHが我が家となったAさん」「重度の知的障害のあるBさん」2名の事例を挙げ、障害の程度の差等で変化していくプロセスに違いがあるのかを確認したいと思います。

また、変化していくプロセスをⅠ期「パターナリズムによる入居」Ⅱ期「嫌ではない場所・生活」Ⅲ期「GHが「我が家」となる生活」の順で3つに分け、変化していく要因を明らかにしていきたいと

思います。

「パターナリズムによる入居」では、心境の変化や表れた行動について記述し、「嫌ではない場所・生活」では、「決められた流れから踏み出し、主体的生活を築く」ことを定義とし、変化の過程を確認します。そして、「GHが我が家となる生活」では「自らで生活を築く」までの過程を確認していきたいと思います。

#### ①GHが「我が家」となったAさん（女性 区分4）

※様々なことが出来る力を持っているが、自信が持てず消極的な方。

##### I期)「パターナリズムによる入居」㊦（入所～4か月間）

入居してから生活の流れには早い段階で慣れ、進んでお風呂当番を行うことや、自分で考えて行動に移せるといった、GHで見通しを持った生活になる一方で、体調を崩す事が増えた点や、職員や仲間に対して、甘える等、自分を見てほしいといったアピールが見られ、環境の変化に対する戸惑いや葛藤が、体調や寂しさで表れたようでした。

当事業所の利用者は、土曜日と日曜日は実家に一時帰宅しています。Aさんにとって、実家で安心できる日があったことは、唯一の戸惑いや葛藤を和らげてくれるものであったことでしょう。

##### II期)「嫌ではない場所・生活」(前期終了～5か月間)

お風呂当番等の自主的な行動は、職員や仲間から称賛される機会となり、認められる機会にもなりました。Aさんは仲間との生活を意識して、新しい環境で自ら居場所を作っていたのです。それらは、「パターナリズムによる入居」で表れていた、体調不良や寂しさが、拭われるキッカケとなり、「嫌ではない場所・生活」へと変化していったと考えられます。

GHの生活に慣れ、仲間との生活にも慣れてくると、仲間との関係性にも変化が出てきました。自分の意見を主張する、面倒を見る、見られる、時には喧嘩することもありました。このような様々な関わりが増え、GHの場だけに関わらず、日中活動の場や様々な場面で互いを意識し合う姿が見られました。このようにして関係が深まっていき、仲間との信頼関係が出来てきたAさんは、GHでの生活を心から楽しんでいけると言える程になっていました。

##### III期)「GHが「我が家」となる生活」(前期終了平成25年1月頃～現在)

信頼関係が出来たことは、Aさんにとって自信へと繋がったと感じられました。生活に必要なことに対して、これまで以上に意識して、自ら進んで行く、または挑戦するようになりました。これまで日用品や食材等の買い物は職員が主体となり一緒に行っていましたが、Aさんは仲間と協力して、職員は同行するという買い物になり、更には、職員が一緒になくとも買い物に行けるようになりました。

このようにAさんのGHでの生活は主体的なものへと変化していきました。今までも買い物等様々な事を出来る力は持っていたかもしれませんが、「やってみよう！」と思う気持ちになれない、そもそも機会がなかったのかもしれませんが、出来ることが増えてきたことで、仲間や職員に止まらず、家族や周囲からも認められることが増えていきました。家族や周囲から認められることはAさんにとって、多い経験ではありません。この事は、更なる自信へと繋がり、また出来ること、挑戦しようと思う事に広がりが出てくるのではないのでしょうか。

#### ②重度の知的障害のあるBさん（男性 区分6）

※他者との関わりを求めることが少なく、嗜好品にこだわりを示す。また、決まった流れやリズムが崩れるとパニックになる事のある方。

##### I期)「パターナリズムによる入居」(入所～1年間)

入居してから、生活の流れは理解するものの、環境の変化に困惑し、不安感を抱いていました。「実家」に帰りたい気持ちが強く、帰りたいことを本人なりの表現で伝えてきていましたが次第に、支援員に対する他害といった行動が目立つようになりました。また、住居から外へ飛び出すこともしばしば見られるようになりました。Bさんは、自分の気持ちを分かってもらいたいという行動だったのだと思います。

Bさんは一時帰宅の際、親に対して気持ちをぶつけていました。それは支援員に対する方法と同じように、他害でした。しかし、支援員がどれほどBさんに寄り添っても親には勝てません。同様にBさんにとっても自分の気持ちを分かってくれる親の存在は大きかったことでしょう。

##### II期)「嫌ではない場所・生活」(前期終了平成24年4月頃～現在)

次第にGHでの居場所が出来た頃、落ち着ける空間を獲得したことで、外に出る、他害といった行動が減り、「嫌ではない場所・生活」へと変化していきました。

生活の流れに慣れると、食事や入浴、余暇の面で自主的な行動をする姿が見られるようになってきました。入居当初は、ある程度決められた時間の食事、支援員の声掛けで入浴といった「流れに乗る生活」になっていました。しかし、食事の時間や入浴の声掛け時に眠気がある、気分が乗らない等で拒むことが出てくるようになりました。これまで、家族との生活では、受容的な生活を送ってきたBさんにとって、自分で考え行動に移すことは、大きな変化だったと言えるでしょう。

更にBさんは、要求・要望が広がっていき、喉が渴いたことを伝えるために、支援員の手を引き冷蔵庫の前まで連れて行くことや、自ら共有スペースのリビングにある雑誌を手にとり楽しむ事、音楽が聞きたいと自室へ行きラジカセを手にとり、支援員に聞きたいことを伝えるなど、余暇の時間を自分自身で考え、過ごせるようになりました。

また、仲間に対しての意識に変化が見られるようになりました。これまでのBさんは、自ら仲間と関わることはなく、支援員が「みんなと一緒に〇〇しませんか?」といった誘いにも積極的ではなく、一人で音楽を聞くことや、雑誌をめくり楽しむことの方が好きなようでした。仲間意識が強くなったと感じたのは、リビングで仲間同士楽しんでいる輪の中に、自然と入ってくる姿が見られるようになり、仲間の誕生日会等のイベントで笑顔がこぼれ、仲間と楽しみを共有することが出来るようになってきたのです。仲間との生活が楽しいものとなってきているのではないかと感じられました。

## 2つのケースについて考察

「パートナーリズムによる入居」での2人を比較してみると、環境の変化に戸惑いや不安感があった事、アピールの方法は違いますが、見てほしい・気持ちを分かってもらいたいといった姿が共通に表れていることが分かります。

支援員は、Aさんが「安心できる」とまではならなくとも、不安感を多少なりとも拭きたいという思いから、楽しい雰囲気や、落ち着ける環境を作り、共にテレビを見ることや、洗濯や調理を一緒に行う等の生活に馴染める取組みを行いました。

Bさんは、他害や、住居から外へ出るといった行動が見られ、支援員は、居場所作りや寄り添う支援を行いました。居場所作りでは、Bさんの実家での生活やバックグラウンドを理解し、GHでの居場所となる落ち着ける空間を作ることに取り組みました。落ち着ける空間を作ることで、GHの生活に慣れてもらいたいという思いがありました。他害や外へ出ることに対しては、寄り添う取組みを行いました。Bさんにとって、気持ちを共感できる存在が必要と考えたからです。具体的には、他害という行為自体はいけな事だと伝えますが、物理的な制御を行わず、「つらいよね。」「不安だよね。」等の声かけにより、一緒に共感する時間を大切にしました。また、外へ出ることにも物理的な制御を行わず、時には、一緒になって途中まで歩き、ジュースを買って帰ってきたこともありました。

また、週末の一時帰宅はAさん、Bさんにとって重要なことだと分かります。入居当初の心情を考えると、安心できる場、親の存在は、生活の場がスムーズに移行するのに大きく影響しているのではないのでしょうか。

「嫌ではない場所・生活」の所では、「自主的な行動」が見られた事と、仲間との関係に変化が出てきた事が2人に共通している事が分かります。

Aさんの自主的な行動は、感謝される内容である事が主で、Aさん自身も“仲間や支援員の為に”という気持ちがあったと思います。支援員がまず感謝をする・認めることで、仲間からも同様の反応が出てきてほしいという思いがありました。実際に支援員が仲間と一緒にになって感謝を伝える等の機会は何度かありました。仲間から認められる機会が増えたことは、AさんにとってGHが安心して生活できる居場所となるきっかけになりました。

仲間との関係では、自分の意見を主張する、面倒を見る、見られる、時には喧嘩する姿が見られた時に支援員は見守る支援を行なっています。あえて支援員が入らずに仲間同士だけの関係を大切にしてきました。このようにして、関係性を深め信頼関係を築いてきました。

一方で、Bさんの「自主的な行動」は、「流れに乗る生活」から一步踏み出した内容でした。この事に支援員は受容する支援を行なってきました。食事の時間に合わせてもらう事や、声掛けのタイミングで入浴してもらうのではなく、Bさんのタイミングに合わせて受容することで、Bさんが主体的な生活を送れることを考えました。そうすることで、更なる、要求・要望を引き出せるようになりました。やりたい事を支援員に伝えてくれるようになり、Bさん自身で余暇の時間を自分自身で考え、過ごせるよ

うになりました。

仲間との関係では、GHの生活により仲間と過ごす時間が増えた事が、様々な事を共有する機会に繋がりました。支援員は食事や、余暇の時間、ちょっとしたイベントで仲間同士の輪が出来る時に楽しい雰囲気作りを行いました。Bさんが仲間と楽しい時間を共有することで、仲間に対する意識を持ってもらいたいと思ったからです。しかしながら、Aさんのように、仲間と関係を深め、信頼関係を築くには至っていないのが現状です。

段階の早さに違いはあるにせよ、おおまかな流れとして、二人が同様の過程をたどっていることが分かりました（もちろんそれは一直線に進むわけではなく、「行きつ戻りつ」あるいは重なり合いながら進んでいっているのですが）。Bさんが今後、取り組みや支援により、仲間との信頼関係を築くことが出来たならば、Aさんの「GHが我が家となる生活」と同様に様々なことに挑戦し、周囲から認められる機会が増えていくことでしょう。将来的にBさんが「自らで生活を築く」ことも出来ると思います。

上記では支援員の取り組みの大切さを確認したところですが、Bさんと同様に重度の知的障害のある方で、仲間の力によって変化していった方を紹介したいと思います。

### ③異質集団の中でのCさん（女性 区分6）

※独自の言葉でのコミュニケーションがある。また特定の職員や環境でないと行動の停止がある方。

I期)「パターナリズムによる入居」(入所～7か月間)

入居してから、生活の変化に中々馴染めず、新しい環境での不安や寂しさ等から睡眠が不安定になり、それに伴い体調を崩す事がありました。また、頭を叩くといった自傷行為が頻繁に見られるようになりました。そんなCさんを気にかけてくれたのは、仲間でした。仲間から「一緒に〇〇しようよ！」と誘われ、トランプやTVを見る事や、時には洗濯物干しや調理といった生活の流れに関わる事を行うようになり、次第に、仲間と一緒にあれば様々なことが、出来るようになってきました。このようにして、Cさんは、生活の流れに馴染むことが出来てきました。

II期)「嫌ではない場所・生活」(前期終了～5か月間)

仲間と一緒に、洗濯物干しや調理等を行うことで、支援員や仲間から感謝される機会が増え、Cさんは次第に誘われる前に、自主的に行なってくれるようになりました。この頃には、不安や寂しさは、ほとんど感じられず、「嫌ではない場所・生活」へと変化していきました。

入居当初から仲間に支えられてきたCさんは、関係が深まるのに時間はかからなかったようでした。発語はあるものの独自の言葉を使い、支援員が理解出来ない為に、コミュニケーションを上手くとれないことがありました。しかし、ちょっとした会話ではあるものの、自然と仲間がコミュニケーションをとっている姿がありました。支援員がCさん独自の言葉について、コミュニケーションをとっていた仲間に意味を尋ねると、その意味を理解しているようで、それに対する返事をしていたことが分かりました。独自の言葉を周りの仲間が理解し、「私の事をわかってくれる！」という気持ちによって、Cさんは以前と比べ、言葉数が増え、言葉をはっきりと言えるようになっていました。また、仲間を笑わせたり、遊びに誘ったりと、Cさんから仲間と関わりたいという姿が見られ、お互いに意識し合う関係が出来ていました。このようにして仲間との生活が楽しいものとなり、仲間との信頼関係が築かれていきました。

III期)「GHが「我が家」となる生活」(前期終了平成25年4月頃～現在)

CさんのGHにいる仲間の中には、「自らで生活を築く」事が出来ている人が数名います。上記で紹介したAさんもその一人です。つまりAさんが職員のいない中、仲間と買い物に行く場面にCさんもいるということです。Aさんと同様に、仲間との信頼関係が自信に繋がっていると感じられます。様々なことに挑戦する姿が見られ、以前のCさんからは想像出来ないほどです。出来ることが増え、家族や周囲からも認められることが増えていきました。それは、更なる自信へと繋がりが、出来ること、挑戦しようと思う事に、より広がりが出てくると思います。

職員の支援だけではCさんのこのような変化は現れなかったと思います。仲間がいた事により、GHでの生活に慣れ自分の居場所を確立し、「自らで生活を築く」までに至ったのだと感じました。

AさんとCさんの暮らす住居“ゆい”と、Bさんの暮らす住居“もやい”のメンバー構成には大きく

違いがあります。“ゆい”の住居は、年齢や障害の程度にバラつきがあり、お姉さんのようなしっかり者の方や甘え上手で皆と関わりを求める方がいる等のメンバー構成になっています。

“もやい”の住居は、年齢や障害の程度に大きく差がなく、一人一人が自分の時間を大切に、皆との関わりをそれほど多く求めない方達のいるメンバー構成になっています。

どちらの住居にも良さがあり、一人一人が生活を築いていっているわけですが、当研究により、Cさんのような仲間引張られる場面が明らかになったことで、改めてメンバー構成の大切さを感じました。

㊦GHへの入居は、残念ながら本人の希望によるものではありませんでした。ここで言う「パターナリズム」は、「その人のためであるとされる、本人の現状よりもより良くするためになされる介入」という積極的パターナリズムの意味で使っています。

引用・参考文献

澤登俊雄編著『現代社会とパターナリズム』ゆみる出版、1997

中村直美『パターナリズム研究』成文堂、2007

### 3. 主体的生活と親からの自立

近年においては「パラサイト・シングル」や「ニート」など、青年の親への依存期が長期化していることが社会問題となっていますが、親からの自立は青年の最も重要な発達課題のひとつである、とされています。

しかし障害のある人たちは「(「物理的」に)親から自立したくても自立できない」状況があります。それが「91歳の母親が63歳の(障害のある)娘の介護をしている」ような状況を生み出しています。このような状況は、障害のある人たちの人格形成にも大きく影響していると思われます。

親から離れ、数十年の「庇護された」環境から、GHへと生活の主たる場が変化し、自分の意志・判断に基づいて友(仲間)と生きていくということは、利用者にとって大きな試練であったと思います。そのような背景を乗り越えることで、主体的な生活へと変化していきました。

そうした変化は、自然と親との関係にも影響が出てきます。前述したAさんとBさんの親との関係の変化について紹介します。

#### Aさん

Aさんは、GHの生活の中で、自身を認めて受け止めてくれる仲間や職員が出来た為、自分なりに色々と考えて自由に行動に移すことができるようになってきました。その結果、Aさんは居場所ができ、自信を持つ事が出来ました。

Aさんのことが心配で、頻繁にGHへ足を運んでいた母親に対して、「もう来ないで大丈夫だよ。」と話をすることができました。GHに入居する前、家での生活は家事や買い物等、基本的なことは母親が行っており、それが“あたりまえ”でした。

#### a)子の親への見方

Aさんにとって親との“あたりまえ”の生活がGHに入居したことにより、“自分自身で出来る事”へと変わりました。それは、心配されなくてもやっていけるという自信が、親に対する言葉として出たことだったのだと思います。また、自分で生活することの大変さを知ったことで、自然と「お母さんありがとう。」と感謝の言葉が出るようになりました。

#### b)親の子への見方

以前までは“私がやってあげないとこの子は何もできないから”と思っていた様でした。AさんのGHでの様子を見聞きし、“一人で出来るんだ”と感じたようで、今では母親もAさんを認め、家事等、様々な事を頼るようになりました。Aさんの変化は、母親も心から嬉しかったようです。

#### Bさん

GHに入居する前、家での生活は、Aさんと同様で、基本的なことは親が行っており、寝る時には母親を求めて一緒に布団に入っていました。

GHに入居してからは、実家に帰りたいという思いが強かったBさんですが、親から離れた生活に慣れ、自分で考えて行動に移すといった「主体的生活」を獲得していきました。そのことにより、一時帰宅の際に、気持ちをぶつける事が減り、親に対する甘えもなくなり、一緒に寝ることをBさんから拒む

ようになりました。

#### a)子の親への見方

Bさんは、親から離れた生活を人生で初めて経験し、GHで居場所が出来、「主体的な生活」を獲得しました。このことは、「親からの自立」と言えるのではないのでしょうか。一時帰宅の際に、気持ちをぶつける事や、甘えがなくなった事は、生活のいくつかの場面かもしれませんが、“一人でも大丈夫”といった気持ちを持たせたことでBさんにとって、親への見方を変える事に繋がったのだと思います。

#### b)親の子への見方

これまでBさんは、親から発信したものを受容する生活が主でした。それは、出来る限り不自由のないようにという親心があったのだと思います。しかし、GHに入居して親から離れてみると、自分の思いや考えを生活支援員に伝えてくれる等、主体的な行動が表れるようになりました。母親はそんなBさんの姿を知り、これまで親離れ出来ないと思っていたけれど、子離れするほうが難しいと、Bさんの変化に喜びを感じていました。

Aさん、Bさんの親との関係の変化を見てみると、GHでの生活は、「主体的な生活」となる機会をつくり、「親からの（心理的）自立」を促すことに繋がるだけでなく、「親の自立」や本人の人格形成にプラスとなると言えるのではないのでしょうか。

### まとめ

これまでの報告を通して次のようなことが言えるのではないのでしょうか。

- ①障害の重い人たちがグループホームを利用する時、まずは（精神的、物理的な意味を含めた）「居場所」を見つけられるかどうか、がスムーズな利用に関係してくる。また、どのような仲間に囲まれるか、も大切な要素となる。
- ②グループホーム生活においては、「主体的生活」の保障が大切である。それが様々な場面での手応えにつながり「自立」に必要な要素となる。
- ③GHでの生活は「生活の主人公」となる機会をつくり、「親からの（心理的）自立」を促すことに繋がるだけでなく、「親の自立」や本人の人格形成にプラスとなる。
- ④親が存命の時期からのGH生活は、「週末には家に帰れる」という支えになり、入居から生活の場へとスムーズな移行につながる。

もちろん様々な課題もあります。

実践的、研究的課題としては、GHのメンバー構成はどのようなものがよいのか、があげられます。今回Cさんの例を紹介しましたが「(障害の程度、年齢等)色々な人で構成されたホーム」の発達の意味があるのかどうか、は検討したい課題です。

また、土曜、日曜等休日の過ごし方も含め、「余暇活動」「文化活動」のあり方も検討課題です。

制度的課題は多くありますが、利用者が「自分の家」として安心して暮し続けられるよう、私たちも制度的整備に向けての努力を不断に続ける必要があると思います。

(ケアホームもやい職員研究集団 : 奥山直廣・田中秀典・永松亮・横瀬さち・吉野孝)